

対面とオンラインのハイブリッドで実践する
国際共修授業の課題
—参加する学生間の意識と参加態度の違い—

高橋美能
(東北大学)

対面とオンラインのハイブリッドで実践する 国際共修授業の課題

—参加する学生間の意識と参加態度の違い—

高橋 美能 (東北大学)

要旨

本稿では、留学生と国内学生が共に学ぶ国際共修授業を対象に、2022年度前期に実践した事例を紹介する。新型コロナウイルスの影響を受けて、対面での授業が制限される中、大学ではオンラインを用いた授業を進めると同時に、国内外の大学間ネットワークを広げた。本実践は、国内外の大学間コンソーシアムの学生がオンラインで参加し、来校が可能な東北大学の学生は対面で参加するというハイブリッド型の国際共修授業である。実践してみると、参加学生の文化やバックグラウンドの多様性が生かされ、学生間で刺激しあう様子が見られたが、オンラインによる実践の限界も明らかとなった。オンラインにおいては、たとえ顔が見えていても言語外の情報伝達が思いのほか乏しくなり、対面での実践に比べて、語学力への依存度が増してしまうのである。他方、オンラインでも参加者に学びは得られていたことから、国内外の大学間コンソーシアムの学生が、1つの授業にオンラインを利用して参加するという新たな学びのスタイルから得られるポテンシャルも確認された。本稿の最後には、本文で分析した事例の分析結果を基に、今後の国際共修授業の可能性についてまとめる。

キーワード：国際共修授業、対面、オンライン、ハイブリッド、学生間の関係性

目次：

1. はじめに
2. 国際理解教育の実践（事例紹介）
3. 考察とまとめ

参考文献

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて、これまで対面で実践されてきた授業が、オンラインやオンデマンド、対面とオンラインのハイブリッドで進められるなど、実践方法が多様化した。本稿の目的は、留学生と国内学生が共に学ぶ国際共修授業の事例を

紹介しながら、オンラインと対面のハイブリッドで進めることで得られる学習効果と実践上の課題を述べ、課題に対する解決策を検討することである。

まず、先行事例の中で国際共修授業を通じて得られる学びといった視点で、どのようなことが確認されてきたのかをまとめておきたい。黒田（2021）は2013～2019年度まで実践してきた、国際共修授業「グローバルリーダーシップ育成基礎演習」の中で、履修生が学んだことを分析している。その結果、異文化間能力における認知的局面、行動的局面、多文化共生のための異文化間コミュニケーション能力、の向上が図られたと述べている（47頁）。その他、多様なバックグラウンドの学生が共に学ぶことで、知識の深まりに加え、異なる見方・視点の気づき、多文化理解、効果的なコミュニケーション能力・学習コミュニティへの帰属意識の向上が得られ（Arkoudis et al, 2013）、自己を客観的に振り返ることの重要性への気づき（徳井, 1999）、言語やコミュニケーション能力の向上、異文化理解の深化、共通点の気づき、異文化コンピテンシーの高まり（末松, 2014）、自己効力感の向上（水松, 2017）、外国語学習の意義、言語的知識や運用能力以外の要素の重要性への気づき（北出, 2010）などが確認されてきた。高橋（2021）は、オンラインで実践する国際共修授業を紹介し、オンラインであっても学生間に意味ある交流を実現することは可能であると述べる一方で、交流の深まりといった点で、対面での実践に比べ、差があることを指摘している（88頁）。以上のように、国際共修授業では授業の学習テーマや内容に関する学びに加え、学生同士が学ぶことで得られる効果があることが確認されてきた。ただ、オンラインの実践については、まだ事例は少ないが、交流の深まりという点で課題があることも指摘されている。

東北大学では国際共修について、「文化や言語の異なる学生同士が、グループワークやプロジェクトなどでの協働学習体験を通じて、意味ある交流により相互理解を深めながら、他者を理解し、己を見つめなおし、新しい価値観を創造する一連のプロセスのこと」と定義し、国際共修授業の開発を行ってきた*。新型コロナウイルス感染症拡大前に高橋（2019）が調査した結果によると、東北大学は全国の国立大学で最多の国際共修授業提供数を誇っていた（7頁）。コロナ禍では、オンラインを利用した国際共修授業の開発に取り組むと同時に、2022年度から全学教育科目の改革を実施し、国際共修授業を学部の必修、または選択必修と位置付け、より多くの学生が国際共修授業に参加できるカリキュラムを築いた。さらに、国内外の他大学で実践される国際共修授業に参加できる仕組みを作った。具体的には世界の大学間国際ネットワークである Association of Pacific Rim Universities (APRU) と大学の国際化促進フォーラム選定プロジェクトで国内の大学間のネットワーク (ICL-Channels) を構築した。大学間で授業の相互履修ができる体制が築かれ、国内外の学生が各々の場所から1つの授業に参加することが可能となった。本稿で紹介する事例は、APRU と ICL-Channels の学生がオンラインで参加した実践で、国外だけ

* 東北大学「国際共修」定義：<https://www.insc.tohoku.ac.jp/japanese/global/icl/>（2022年1月2日閲覧）

でなく、国内の他大学の学生が1つの授業に参加することで、学生間の新たな多様性が生まれることを期待した。しかし、高橋(2021)が指摘したように、実践する中で直接の交流ができないため、交流が深まらないという課題も明らかとなった。

2. 国際理解教育の実践(事例紹介)

本稿で紹介する事例は、2022年度前期に対面とオンラインのハイブリッドで実践した授業である。この事例を取り上げる理由は、国内外のコンソーシアムの大学から学生が集まるため、オンラインでの実践を予定していたが、よりきめ細やかな指導を目指して一部の学生を対面に切り替えて実践したため、オンラインと対面の学生間の参加態度に違いが生じたからである。本事例を分析しながら、オンラインを用いた国際共修授業の可能性と課題を検討する。

① 授業概要：

本授業は「国際理解教育の実践」というテーマで全15回、英語で実践した国際共修授業である。1回目～10回目の授業は、90分間の授業を前半と後半に分け、前半は参加学生の文化紹介、後半はテーマに関するグループディスカッションで進めた。前半の文化紹介は、参加者それぞれが5分程度の発表をした後、約15分間参加者から質問を受けて、発表者が答えながら質問者とディスカッションし、発表者の文化や教育事情を学ぶというものであった。文化紹介の課題は、「発表者の文化を紹介すること、発表者の国の教育事情を説明すること」の2点としていた。1回の授業で3名程度の学生がアイスブレイキングとして文化紹介を行い、相互理解を深め、異なる国の教育制度を学んだ。後半の各テーマに対するディスカッションは、授業時間2回分を充て、1つのテーマを議論し理解するというものとした。1回目はグループでのディスカッション、2回目はグループでディスカッションした内容をクラスで共有したうえで全体でディスカッションし、理解を深めるという形で進めた。グループのメンバーはテーマごとに変えた。全15回のテーマと概要は以下の通りである：

はじめに

1回目・2回目：道徳は誰が教えるべきか？親、学校、その両者、役割は？

3回目・4回目：歴史教科書の意義と課題

5回目・6回目：教育が抱える問題、教育の権利、子どもの最善の利益

7回目・8回目：平和教育と国際理解

9回目・10回目：言語教育と国際理解

11回目～13回目：最終発表の準備

14回目・15回目：最終発表

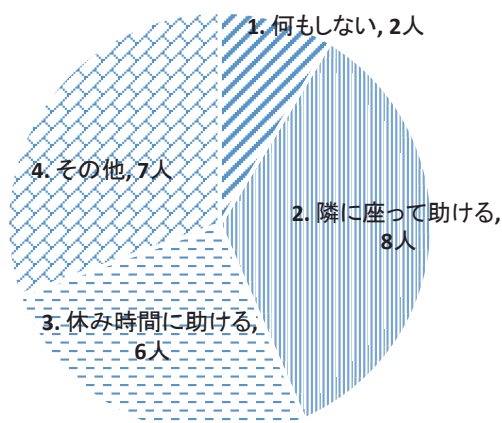
授業は、全てオンラインで進める予定であったが、オンラインでは参加者間の交流促進

に限界があったことから、5回目の授業から東北大学の教室に来ることができる学生に対しては対面に切りかえて実践した。評価方法は、出欠と参加態度（20%）、宿題の提出（30%）、最終プレゼン（30%）、最終レポート（20%）、とした。参加者は、履修登録者が合計35名（留学生22名、国内学生13名）で、本クラスには東北大学の大学院生のティーチングアシスタント（TA）が1名と国際共修サポーターの学部生が1名参加していた。TAは、出欠や課題の提出状況の確認、グループ活動をする際のメンバー構成の検討、授業全般のファシリテートなどの役割を担い、国際共修サポーターは学生間の交流促進を主な目的として、授業の前半に実施した文化紹介の内容チェックや当日の司会進行役を担い、参加学生とのコミュニケーションをとってもらう役割を担った。

② 初回アンケートの実施

国際共修授業には、言語や文化の多様な学生が集まる。その中では学生間に言語の壁があることも明らかとなっている（高橋 2018）。筆者は、この参加者間の言語の壁を解決するために、参加者がどのような助け合いをするかを尋ねる目的で、2010年に国際共修授業を担当して以来、継続して初回の授業でアンケート（参考資料1）を実施してきた。このアンケートでは、言語面での相互支援について尋ねるだけでなく、参加者の参加目的についても確認した。これによって、筆者は参加者のバックグラウンドと参加目的を確認することができた。

履修登録者35名中、アンケートへの回答者は23名であった（留学生10名、国内学生13名）。回答者は研究等の目的での回答の使用について、同意書（参考資料2）に署名済みである。本稿では35名中、同意書の提出のあった23名について紹介するため、参加者全員の実践記録ではないことを断っておく。回答者の国籍は、日本、アメリカ、中国、台湾、香港、韓国、ドイツ、ルーマニア、であった。回答者23名中の男女比は女性14、男性9名であった。学部はさまざまで、経済、経営、薬学、理学、文学、工学、政治学、情報科学、日本語、メディア、コミュニケーション、教育、外国語、であった。学年は、学部1年～5年まで、幅広く参加していた。国内学生の海外経験は、旅行や留学といった点が挙げられていた。次に、言語面でハンディキャップのある学生への支援については図1のような回答が得られた。この学生間の言語の壁は、対面・オンラインの実践方法の違いに関わらず、国際共修授業で共通して起こりうる問題であり、ハイブリッドによる実践で新たに生まれる課題ではない。一方で、オンラインで参加する学生には、特に高い語学力が必要とされる。なぜなら、対面であればアイコンタクトやジェスチャーなどのコミュニケーション方法が可能であるが、オンラインでは、たとえ画面がついていても、アイコンタクトやジェスチャー等、言語外の微細な情報が伝わりにくく、言語に頼らざるを得ないからである。そうした理由から、オンラインで実践する際は、参加者間で語学力の格差が少ないことが望ましいが、今回のように参加者の語学力に著しい差がある場合には、参加者全員が言語面のハンディキャップを抱えた参加者の存在を認識し、お互いにどうすれば



【図1：言語面でのハンディキャップに対する意識】

格差を埋められるかを意識することが重要になる。筆者は、国際共修授業を担当する際に、まずは参加者間の言語の壁を意識させ、2回目の授業でアンケート結果を参加学生に共有し、クラス内には異なる見解を持った人たちが集まっていることを説明し、互いに協力しあうことを促してきた。

図1から、国際共修授業に参加する学生の多くは、助けることに前向きであることが分かる。このような回答は、筆者が2010年から継続的にアンケートを実施する中で、共通する回答として確認してきた。助けられた経験は少なからず誰にもあるので、当たり前かもしれない。しかし、あえて参加者に問うことで、クラス内に言語面でのハンディキャップの存在を意識付け、相互支援の必要性を促すことができる。オンライン・ハイブリッドに関わらずアンケートで確認しているのはそのためである。また、ここで興味深いのは、4「その他」を選んだ学生の意見である。以下に紹介する（筆者が日本語訳）：

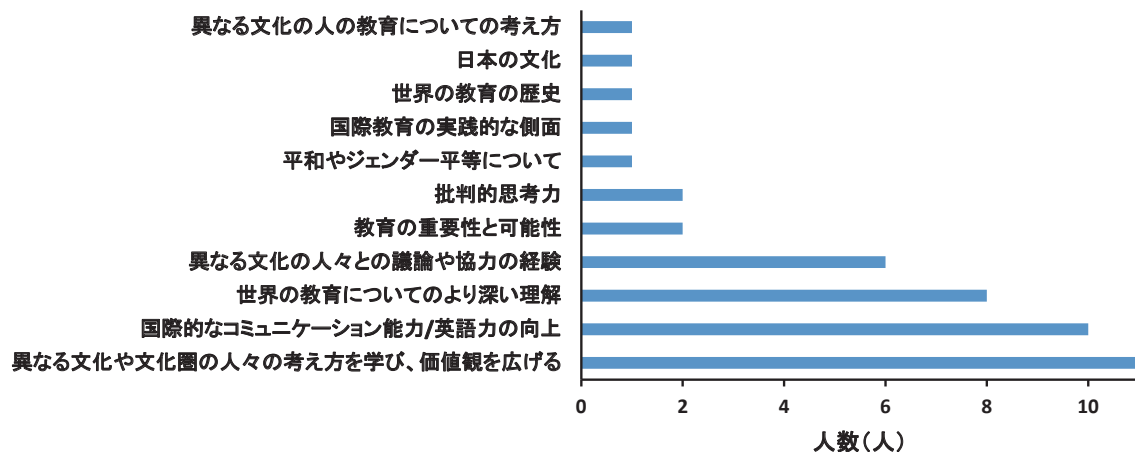
- a 直接助けを求められたときのみサポートする（ドイツからの留学生）
- b 助けを申し出るが、自分自身で学び解決することも勉強だと思う（ルーマニアからの留学生）
- c 彼ら自身でも解決できる可能性がある / 求めている場合には、自分の考えを押し付けたくないため、助けを求めることはよくないと思う（アメリカからの留学生）
- d 自分自身の英語もつたないので自信はないが、何とか助けたい（日本人学生）
- e 授業後に彼ら自身が助けを求めてきたら助ける（中国からの留学生）
- f 要点だけ授業中に伝え、詳しい内容は授業後に教える。授業の内容を理解することは重要だが、自分自身の時間も大事なので、授業中に要点は伝える（中国からの留学生）
- g SNSを通してサポートする（日本人学生）

以上のa～cは、積極的に助けるというよりは、助けを求められたら助ける、自分で解決

することも大切である、といった意見である。このような意見は筆者が同じ科目名で10年前から実施してきた中で毎回数名の学生から挙げられている。学生の中には、受動的に助けられることを待っている者がいる。そのため、2回目の授業で筆者は、「必要があれば自ら助けを求める姿勢も大切である」と説明し、クラス内で助け合うよう促すと同時に、参加者の心構えとして、国際共修授業のクラス内には、自分と異なる見解を持った学生がいることを意識付けてきた。このような見解の違いを学生が理解して参加することが大切であり、異文化理解を深める姿勢にもつながると考えている。実際に、オンラインで参加する学生に対して、教員ができるサポートは、対面の学生よりも限られる。支援を補完する意味でも、参加者一人ひとりが互いに助ける意識を持って臨むよう促すことは有効である。

③ 参加目的

初回アンケートで学生が記述した履修目的を図2で紹介する。



【図2：参加目的】

図2を見ると、多くの学生から「異なる文化や文化圏の人々の考え方を学び、価値観を広げる」「国際的なコミュニケーション能力/英語力の向上」「世界の教育についてのより深い理解」といった点が挙げられていた。これらは、国際共修授業を受講する学生の共通の目的である多様なバックグラウンドの学生と共に学び交流したい、価値観を広げたい、コミュニケーション能力を向上させたい、といった点である。また、本授業のテーマである国際理解教育についての興味・関心と目的を挙げている学生もいることが分かる。

④ 実施状況

ここでは、実践上一部対面を取り入れた経緯とテーマごとに議論された概要を紹介する。まず、実施方法について説明する。全15回の授業の内、1回目～10回目までの授業は、2回分の授業で1つのテーマについてディスカッションする形で進めた。初回は全員

オンラインで実施したが、9名は東北大学の学内にいる国内学生であった。また、これらの東北大生にはオンラインでの英語のディスカッションは初めてのようであった。クラス内に言語面での差がある中で、オンラインで参加者全員が対等にディスカッションすることに限界があった。5回目以降、教室での参加が可能な学生は対面でグループを作り、オンラインのみの学生はオンラインでグループを作って活動を行った。結果として、13名がオンライン、22名が対面での参加となった。

最初の回はオンライン参加者も全員がビデオをオンにして参加しており、顔が見える形での参加であったが、回を重ねるごとに徐々にビデオをオフにする学生が増えてきた。グループディスカッションであっても、ビデオをオフにしたまま顔を見ずにディスカッションする様子が見られた。5回目以降、対面で参加する学生は、回を重ねるごとに関係性を深め、休み時間にも話をする様子が見られた。オンラインではなかなか議論に参加できなかった学生が対面では積極的に参加し、発言する様子が見られた。逆にオンライン参加学生の関係性は弱まっていった。

次に、各テーマで学生が議論した内容をまとめておきたい。まず、1, 2回目の授業で道徳、特に社会性についてディベートを行った。答えのないクエスチョンではあったが、参加学生が自身の意見を述べ、議論を深めていった。3, 4回目の授業では、歴史教科書問題を取り上げ、中国の学生、韓国の学生の意見も聞きながら、日本の歴史教科書の問題、他の国の歴史教科書の実態を共有した。5, 6回目の授業は、教育の権利について考えた。ここでは、受け身で教育を受けることについて批判的な意見が述べられ、アジアの教育と欧米の教育の違いについて、参加者間で自身の経験を共有しながら議論が展開された。7, 8回目の授業では、主に第2次世界大戦と戦後の日本の平和教育の在り方について、参加学生自身が経験した平和教育を共有し、平和教育の重要性を検討した。9, 10回目の授業では、言語教育と国際理解といった点で、留学中の学生からは自らの経験が語られ、実際に語学と国際理解は密接な関係にあることが確認された。

⑤ 参加者の学び

前項で授業の実施状況を説明したが、オンライン・対面の参加方法の違いにより、学生の参加態度に違いが見られる中、参加学生は何を学んだのだろうか。初回アンケートで参加学生に対して、言語支援に関する意識、および参加目的を尋ねた。互いに協力することについては、前向きな学生が多いこと、異なる文化や考え方を学びたいとの思いで本授業を履修したことなどが確認された。それでは、参加学生は目的を達することができたのだろうか。ここで、学生が最終レポートに記述した内容から、学生の学びという点で以下にいくつか紹介する（筆者が日本語訳）：

オンライン参加者：

ハイチ出身のオランダの大学に通う留学生（APRU）：

この授業を通じて多様なバックグラウンドの学生と共に異なる教育事情を学ぶことができた。クラスメートの異なる話し方や議論の仕方にも驚いた。私はオランダではあまり議論に積極的に参加するタイプではなかったが、この授業で発言する力を高めた。その中で日本との違いに驚いた。アジア人も積極的に発言し、課題に忠実に取り組む姿に驚いた。

ハイチ出身のオランダの大学に通う留学生（APRU）：

この授業を通じて、他の国の教育事情を学ぶことができた。また、他の文化や言語を持つ人たちとのコミュニケーションの方法も学んだ。このクラスで、アジアの国々の課題についても知ることができ、学びが大きかったと思っている。

中国の大学に通う留学生（APRU）：

他の国のクラスメートとのディスカッションがとても貴重だった。他の中国人の学生とも仲良くなった。同時に、日本の学生とも親しくなった。ある留学生は語学力が高く、驚いた。語学学習と国際理解のトピックで話をしていた時、本当に驚いた。もっと多くの学生と交流したかったし、日本にいれば教室でも会えたのだと思うと、オンラインでの参加を残念に思う部分もあった。

中国の大学に通う学生（APRU）：

私が以前中国で学んだクラスと異なっていた。異なるバックグラウンドを持つ学生と議論でき、毎回多くのことを学んだ。議論する中で、クラスメートとの違いだけでなく共通する点も確認でき、勉強になった。

ドイツの大学に通う留学生（ICL-Channels）：

毎回、授業中の議論を通じて多くの学生と共に学ぶことができた。議論したり、発表したり、発表を聞いたりしながら、異なる教育事情を学ぶことができた。特に、議論の中で言語面でのハンディキャップを乗り越えていく中で、新たな気づきがあり学びも大きかった。議論しながら私たちの間の違いと共通性に気づくことができ、興味深かった。

国内学生（ICL-Channels）：

この授業で、SNSを通じてクラスメートと交流することができ、多くの学生とつながることができた。私がこれまで学んできた知識を共有し、クラスメートと議論することで、学んできたことがクラスメートによって詳しく説明され、理解が深まり、文化をより知ることができた。それだけでなく、東北大学の学生と交流できたことは興味深かった。同じ日本人であっても考えが異なることに気づき、自分の意見を伝え、新たな示唆も得られた。

このようなコースはグローバルマインド醸成に欠かせない方法ではないかと思う。

以上のオンラインでの参加学生の意見から、オンラインの参加であっても議論を通じて異なる教育事情や文化を学ぶことができたと考えられる。APRUとICL-Channelsの学生間の意見に大きな差は見られなかったが、ICL-Channelsの国内学生から、国内であってもこんなに違いがあることに気づいたという声が聞かれている。

以下は、途中から教室での参加となった学生：

中国から来日した留学生（東北大学の交換留学生）：

このコースを通じて、多様なバックグラウンドを持つ学生と交流する機会を得ることができた。毎週、ディスカッションの時間がとっても楽しみだった。しかし、オンラインでは消極的な学生もいて、ビデオもオフでディスカッションに参加している姿が見えない学生がいたことが残念だった。このような問題は、教室での授業に切り替わってから解決し、参加者の顔が見える形での議論ができてよかった。議論を通じて国の教育制度の違いを知りだけでなく、異なる意見を聞くことができ、文化や教育の理解が深まった。

国内学生：

私はここまで多様なバックグラウンドの学生と出会えると思っていなかった。やはり対面で、顔を合わせながらの議論が一番良かった。その中で他者の意見を聞き、多くのことを学んだ。授業を通じて教育について学ぶだけでなく、実践的な英語力をつけることの大切さを感じた。学内で英語を実践できる機会に自ら参加し、今後も英語力、異なる意見やバックグラウンドの人たちとの交流を行っていきたい。

国内学生：

本クラスで多様なバックグラウンドの学生と交流し、議論をする中で、時に自身が司会を務めることもあり、自信につながった。オンラインやハイブリッドで進められる中で、自分の意見を述べ、グループの意見をまとめる中で、自分がやり遂げられたことがうれしかった。他の学生との交流という点では、最初の文化紹介が楽しかった。Q&Aでのインタラクションで自身の質問をして、交流できたのも面白かった。この授業を通じて、多様なバックグラウンドの人たちと臆せず交流する、意見を述べる力を高めることができた。

国内学生：

最初はオンラインで参加していたが、パソコン上では意見交換がしづらいつと感じた。途中から対面になり、少しずつ発言ができるようになった。最初は日本人同士の議論をしていたが、徐々に留学生とも議論できるようになり、実践的な英語力をつけることができ、もっと上達したいと思っている。

対面で参加した学生からは、対面の良さが挙げられている。以上のオンラインと対面の学生の意見から、実践上の課題は残されているものの、参加者はオンラインであれ対面であれ、多様なバックグラウンドを持つ学生と共に学ぶことで、新たな気づきを得ることができた。また、国や地域により異なる教育事情があることを学ぶことができた。オンラインと対面の両方に参加した学生からは、対面の良さが聞かれ、改めて対面で実践する国際共修授業の意義が確認された。本授業を通じて今後も異なるバックグラウンドを持つ学生との交流を継続したいとの思いを強くした学生もいた。

3. 考察とまとめ

前章で紹介した事例は、国内外の大学間コンソーシアムの学生がオンラインで参加し実践したもので、多様なバックグラウンドを持つ学生が集まる環境が作られた。初回アンケートの結果から、参加者側も多様な学生との交流を期待していることが伺えた。しかし、学生の多様性という点では新鮮であったが、学生間の関係性構築の点では、先に述べた通りオンラインで参加する学生間で課題が残った。また、国内外の学生が集う国際共修授業の実践は初めてで、筆者もオンライン参加者へのサポートの限界を改めて確認することとなった。人数が多かったこともあり、グループ活動の際、筆者はオンラインのグループを回りながらディスカッションの様子を見たが、先にも言及した通りビデオをオフにしたままの参加者が多く、お互いの顔を見ることなくディスカッションを行う様子が見られた。このことは、ビデオをオンにしている学生のモチベーションにも影響した。国際共修授業の目的である意味ある交流を実現するためには、まずは学生が興味を持って参加できるようディスカッションのトピックを工夫することが大切である。本実践の大部分は文化紹介とテーマのディスカッションだったが、今後は前半のアイスブレイキングにはもっと日常的なトピックを取り上げて参加者全員が考え、グループで話す機会を設けてみてもよいかもしれない。テーマに関する議論は、固定グループを作り、メンバー間で親密な関係を築けるような配慮も必要であろう。

以上のように、課題は残ったが、学生が最終レポートにまとめた内容から、多様なバックグラウンドを持つ学生同士が交流する意義は改めて確認できた。今後の実践では以下のような解決策を取り入れていくとよいのではないかと考える。

- a. 対面で参加できる学生については、初回から対面で実施することを伝え、お互いの顔と名前が覚えられるような環境を作ることが必要であると考えます。
- b. オンラインと対面のハイブリッドでの実践は技術面も含め、難しさがあった。オンラインと対面に分けてグループを組んだが、ディスカッション・最終発表ともに、オンラインのみ、対面のみグループにせず、メンバーをミックスすることも検討したい。また、本実践ではテーマごとにグループのメンバーを変えたが、ある程度の期間同じメンバーで活動することで、オンラインのみの参加者間の関係性が強化する可能性が

- ある。
- c. 最初の文化紹介が長くなりがちであったため、メリハリをつけるという意味で発表の時間や質疑応答を短くし、誰もが興味を持てるようテーマを検討する必要もある。この点は先にも述べたが、必ずしも個々の文化紹介ではなく、毎回誰もが小グループで話し合うことが可能な時事問題等を挙げて、アイスブレイキングすることも考えられる。
 - d. 今回はグループ活動のたびに、メンバーを変え、メンバー間で役割分担（司会、記録、プレゼンテーション取りまとめ）するよう伝えたが、毎回同じ役割になる学生が多かった。今後は、教員・TAがメンバーと役割を決め、異なる役割を経験させることが必要かもしれない。
 - e. カメラをオフにして参加すると、他のメンバーのモチベーションを下げるため、初回の授業でカメラをオンにするルールを徹底する必要がある。ただ、どうしてもオンにできない学生の参加を認めるかを検討する必要がある。
 - f. クラス専用のSNSなど、課題や提出物のリマインド等も含め、自由に参加者が意見交換できるプラットフォームを作ることも学生間の関係性構築に役立つだろう。

国際共修授業の目的の1つは学生間の交流である。15回の授業では十分な関係性を構築し、授業終了後も継続するほど関係性を深めることは難しいが、授業をきっかけに、さらなる交流への意欲が湧き、交換留学等に参加して、異文化での学びに自らチャレンジするきっかけとなる可能性はある。

先行研究でも指摘されていたが、本実践の分析においても、オンラインでの国際共修授業には、学生間の関係性が深まらないという課題が残された。今後は先にまとめたa～fの解決策を講じながら、その他の解決策を模索しつつ、ハイブリッドの実践を継続し、事例を分析していく必要がある。今後も、多様なバックグラウンドを活かし、参加者に多くの学びが得られるプログラムの改善、実施方法を検討し、報告していきたい。

参考文献

- 北出慶子（2010）「留学生と日本人学生の異文化間コミュニケーション能力育成を目指した協働学習授業の提案－異文化間コミュニケーション能力理論と実践から」『言語文化教育研究』9（2），65－90頁
- 黒田千晴・ハリソン，リチャード（2021）「プロジェクト学習型国際共修授業における教育実践：学習者間の学びを促す仕組みについて」『神戸大学留学生教育研究』5，45-68頁
- 水松己奈（2017）「プロジェクト型『国際共修』が学生の自己効力に与える影響－Kolbの経験学習モデルを用いてデザインした授業に関する一考察－」3巻，115-129頁
- Sophie Arkoudis, Kim Watty, Chi Baik, Xin Yu, Helen Borland, Shanton Chang, Ian Lang, Josephie Lang, and Amanda Pearce（2013）“Finding common ground: enhancing interacting between domestic and international students in higher education,”“Teaching in Higher Education,” Routledge, pp. 222-235

- 末松和子 (2014) 「キャンパスに共生社会を創る－留学生と日本人学生の共修における教授法の確立に向けて－」『ウェブマガジン「留学交流」』9月号, Vol.42, 11-21 頁
- 高橋美能 (2021) 「多様なバックグラウンドを活かす国際共修授業の実践－オンラインで実践する授業のメリットとデメリット－」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』7巻, 79-90 頁
- 高橋美能 (2020) 「多様なバックグラウンドを持つ学生が共に学ぶ人権教育－国際共修授業の効果と課題－」『留学生交流・指導研究』23号, 93－106 頁
- 高橋美能 (2019) 「国際共修授業の普及と多様なバックグラウンドの学生同士の多文化共生」『ウェブマガジン「留学交流」』7月号, Vol.100 (https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2019/_icsFiles/afieldfile/2021/02/19/201907takahashimino.pdf, 7 頁)
- 高橋美能 (2018) 「国際共修授業における多文化共生の実現：学生同士の言語サポートを促すことを通じて」『留学生交流・指導研究』21号, 49-62 頁
- 徳井厚子 (1999) 「多文化クラスにおける評価の試み－自己変容のプロセスをとおして見えてくるもの－」『メディア教育研究』第3号, 61－71 頁

参考資料1：質問紙

本クラスで学びたいこと、また興味のあることについて、ご意見をお聞きしたいと思います。こちらの回答結果は、今後の授業実践や研究目的で使用させていただくことがあるかもしれませんが、個人が特定されないよう十分注意いたしますので、ご理解いただければと思います。

名前： _____

国籍： _____

性別： 男性 ・ 女性 _____

学部・学年： _____

(丸を付けてください) 大学院・学部 _____

(日本人学生のみ) 海外経験： 無 ・ 旅行 ・ 留学 _____

(1) 言語の問題で、なかなかクラスやグループ活動に参加できないクラスメートがいます。

あなたはどのようにしますか？

- ① 自分がとる行動に最も近いものを1つ選んで丸を付けてください
1. 何もしない
 2. 近くに座り助ける
 3. 休み時間に助ける
 4. その他 (具体的に記述してください).
- ② 理由を記述してください

(2) 本コースを通じてどのような学びを得たいと考えていますか？クラスに期待していることを具体的に記述してください

参考資料2：同意書

本授業「【国際共修】国際理解教育の実践」では、積極的なご参加に感謝申し上げます。本授業は非常に活発な議論と皆さんの参加があり、ぜひ、今後の授業及び国際共修関連の授業改善・発展に皆さんの発言や授業時の参加の様子、レポートの内容を参考にさせていただきたいと思っております。そこで、皆さんに以下の内容を確認いただき、参加同意書に署名をお願いしたいと思っております。ご協力お願いいたします。

授業中の発言やアンケート、最終レポートの内容の公開に関する了承

授業中に参加者一人ひとりが発言した内容、参加態度について、研究目的で分析し、研究発表を行いたいと思っております。

個人情報とデータの取扱い

取得したデータや個人情報は、授業の改善及び研究目的以外には使用しません。個人名は匿名化され、専門学会、学術専門誌、学内研究会等を通じて研究発表する際も個人情報は守秘されます。データの保管には万全を期し外部へは漏洩しません。

同意の有無

同意有無を自由意志で決定してください。また、一度同意した後でいつでも同意を取り消すことができ、それによる不利益はありません。同意が撤回された場合には、本調査で得られたデータを破棄し、それ以降の研究には一切使用いたしません。但し、取り消し要求された時点で公表済みのものがある場合は、このデータを破棄できませんのでご承知おきください。

同意することによる利益と不利益

同意されなくても不利益を受けることはありません。単位取得者に関しての成績評価とは関係ありません。

以上、何かご不明な点がありましたら遠慮なくお尋ねください。

皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

東北大学 高度教養教育・学生支援機構

グローバルラーニングセンター

准教授 高橋 美能 (mino.takahashi.c3@tohoku.ac.jp)

成果物の公開と調査協力同意書

私は、以上の説明を理解し、同意します。

____年 ____月 ____日

氏名：

Challenges of Intercultural Collaborative Classrooms Conducted by Hybrid Method Combining Face-to-Face and Online -Differences in Motivation and Attitude towards Classes among the Students-

Mino Takahashi (Tohoku University)

Abstract:

This paper analyzes Intercultural Collaborative Classes held from April to August 2022 where Japanese students studied together with students from across the globe. The class was taught as a hybrid course which combined face-to-face and online instruction. Since 2020, because of COVID-19, the classroom has changed, from mainly face-to-face instruction to either online or hybrid instruction. At the same time, the boundaries of the classroom have expanded to encompass the world. Moreover, this has also helped students from different universities in Japan to attend the same online class and study together. This makes the classroom more diverse and interesting for students who can discuss certain topics with the benefit of a range of perspectives and experiences. The results were in line with the initial hypothesis, but some challenges remain. One of the biggest challenges is that some online students did not show their faces, which means that students discussed the subject matter without seeing each other's faces. This was disappointing to some students and they lost the motivation to study together with others. This also made it difficult for students to build good relationships with other students. Students may have chosen not to show their faces due to the inability to turn on their cameras as a result of low internet bandwidth, shyness about showing their faces, or disengagement and lack of motivation.

Though some challenges remain, online classes help students meet students from all over the world and get together in one classroom, and give them the opportunities to discuss a variety of matters, which is actually stimulating to a lot of students. It is important to harness the potential of this type of class by overcoming the challenges.

Key words :

Intercultural Collaborative Classes, Face to Face, Online, Hybrid, Relationship among the Students